イスラーム世界研究　第２巻１号（2008 年）250-256 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 2-1 (2008), pp. 250-256

スーフィズム・アンソロジー・シリーズ　２

カラーバーズィー『タサウウフの徒の教えの解明』より 第 32 章「タサウウフとは何か」 解題・翻訳ならびに訳注[1)]

東長　靖 *

１．解題

１）スーフィズムの誕生について

前回はスーフィズム登場以前のズフドの段階を取り上げた。いつとはっきり言うことはできないが、９世紀の半ばごろから、ズフドとはさまざまな点で様相を異にする新しい段階が始まったと見ることができる。前回見たズフドのあり方は、暗い色調に彩られたものだったが、同じ時代に「愛」の概念を導入したとして広く知られるのが、ラービア・アダウィーヤ（Rābi‘a al-‘Adawīya, 185/801 年没）である[2)]。アッラーの命令に十分に従いえない自分を嘆く姿が、前回訳出したズフドの書では顕著であった。実際､「泣く」「哀しむ」といったことばが何度も現れていた。これに対して､アッラーと自分との間に愛の関係を見出そうとする新しい潮流が生まれてきていたのである。

この神と人間との近さを一つの要素としつつ、すでに確立しつつあった法学や神学の形式主義･極度な思弁化に飽き足りない人々が、個人の内面に眼差しを向け、第三者の介入を許さない神との親密な関係を希求したことが、新しい段階を生んだと言われている。これがスーフィズムである。ヨーロッパのスーフィズム研究においては、セム的律法主義に対置する形で、キリスト教とも通底するある種の普遍主義としてスーフィズムを理解しようとするため、イスラームそのものに由来せず、何らかの外的要素が元となってスーフィズムが生まれたと考えてきた。ネオプラトニズム・キリスト教神秘主義・グノーシス・カバラ・インドの神秘主義など、さまざまな外来文化の影響がこれまでに指摘されている[3)]。もっとも、こういう「スーフィズム外来説」は、マスィニヨンの研究［Massignon 1954］以来むしろ影をひそめており、ある程度の影響は認めるにせよ、やはりスーフィズムはイスラームの土壌の中で内発的に生まれてきたものだと考えるのが、今日の主流といってよいだろう。

２）「タサウウフとは何か」について[4)]

「タサウウフとは何か」は問うにたやすく､答えるに難しい問いである。古来､数多くのスーフィー

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
京都大学イスラーム地域研究センター副センター長

1)　本稿作成時、筆者は海外に滞在していたため、一部の資料が手元になく、これらについて正確な情報を得るにあたって、中西竜也氏（京都学園大学）のご協力を得た。記して感謝したい。

2)　ラービア・アダウィーヤが愛の要素を持ち込み、タサウウフの先駆となったというのは通説であり、彼女に関する徳行伝などもイスラーム世界で書かれている。ただし、彼女の名声はむしろキリスト教世界において形作られ、欧米の研究者たちがこれを採り入れたのであり、彼女が実際イスラーム思想史上で果たした役割を、より小さく評価すべきだという意見もある。これについては、［東長 2002:182］を参照のこと。

3)　たとえば [Baldick 1989: 15-24] は 10 以上の起源説を列挙して説明している。

4)　筆者は「スーフィズム」という概念はオリエンタリストによって作り上げられたものであることを指摘し、原典や実際のフィールドに根ざしたものを指す時には「タサウウフ」の語をあてることにしている。くわしくは、［東長 2002］参照。ただし、本稿はこの両者の違いにとくに力点を置いて論ずるものではないため、解題においては主としてスーフィズムの語を用いている。

が、逆にスーフィズムに顔をしかめる人々が、また研究者たちが、この問いに対して無数の答えを与えてきた。筆者は以前、この問いに答えることがいかに難しいかを論じたうえで、タサウウフの定義をすることに代えて、「三極構造」で理解することを提唱した。この問題に関する詳細は、拙稿［東長 2002］をご覧いただきたいが、ここでは、スーフィーたち自身が述べてきた定義めいたものを、むしろ「警句」として理解すべきだと説いたフランク［Frank 1984］の説に注意を促しておきたい。スーフィーたち自身が述べた「タサウウフとは……」という言説は、学問的定義として使うには規範的すぎ、現実にわれわれが現場で（それは現代のフィールドに限らず、前近代の写本の中でも同様である）出会う様々な姿を包括的に表すには、たしかに適していない。しかし、彼ら自身がそれぞれのことばで語った警句は、含蓄に富んでおり、傾聴に値するものである。

ちなみに、「スーフィズムとは」というさまざまな警句を集めたものとして、日本語では［ニコルソン 1996 (1914): 40-42］、英語では［Nurbakhsh 1981: 16-41］を挙げることができる。これらの警句は、それぞれがあまりに絢爛としており、あるいはまた時には晦渋でありすぎるかもしれない。しかし、スーフィズムという対象に向けて思索家・修行者たちがさまざまに描いてきた思いをその中に読み取ることができるだろう。

本稿では、それら数多い「警句」の内、10 世紀半ばから 12 世紀半ばまでの間にスーフィー古典理論を整理・体系化した人々の一人として高名なカラーバーズィー（380/990 年没）の主著『タサウウフの徒の教えの解明』の一章を取り上げ、紹介してみたいと思う。

3）カラーバーズィーの生涯について[5)]

名前は Abū Bakr Tāj al-Islām Muḥammad b. abī Isḥāq b. Ya‘qūb al-Bukhārī al-Kalābādhī。スーフィズムの古典マニュアルの執筆者の一人として高名。法学者・神学者・ハディース学者でもあった。

もっともその名声に比して、生涯はほとんど分からない。生年は不詳だが、339/950-1 年没の人物にハディースを学んでいることからマデルンクは遅くとも 320/932 年に生まれたと推定している。ニスバの元となっているカラーバーズはブハーラーの一区画なので、ここで生まれたか、少なくとも一時期暮らしていたことは間違いない。サマルカンド、レイ、ハマダーン、クーファ、バグダードといった地名は、彼の著作に言及があるので、おそらく訪ねたことがあると思われる。

スーフィーとしては、Isḥāq b. Muḥammad Ḥakīm Samarqandī（d. 342/953）、Abū al-Qāsim Fāris b. ‘Īsā Baghdādī（Dīnawarī とも。ジュナイドの弟子であり、『タサウウフの徒の教えの解明』第 42 章にその名が出る）、Abū al-‘Abbās b. ‘Aṭā’, Muḥammad b. Aḥmad Fārisī（今回訳出した部分の言葉を語った人物であり、スラミーの『スーフィー列伝（*Ṭabaqāt al-Ṣūfīya*）』にも主要な情報源として登場する人物）らに師事した。

ブハーラーで没した。没年には 380/990 年説、384/994 年説、385/995 年説がある。その後彼の墓は参詣地になっていたことを、たとえばナクシュバンディー教団のシャイフ Muḥammad Pārsā（d. 822/1420）や著名な説教師であった Wā‘iẓ al-Kāshifī（d. 910/1504-5）らが伝えている。

後代の伝記における彼に関する記述は少ない。スーフィー列伝･聖者列伝においては、アブドゥッラフマーン・ジャーミーの『親愛の息吹（*Nafaḥāt al-uns*）』に記述があるのみで、ほかの列伝類には見られない。しかも独立項目ではなく、上述した師ファーリス・イブン・イーサー・バグダーディーの項目の中で、カラバーズィーがその言葉を多く伝えたという形で言及されるだけである［Jāmī

5）本節作成にあたっては、［Arberry (tr.) 1935; Nwyia 1978; Zarrīnkūb 1357 A.H.S./1978-9: 68-70; Madelung 1985; Uludağ 2002］を参考にした。

1370A.H.S.: 157]。ハナフィー法学派のウラマー列伝にも名前が挙がるが、ごく簡潔に述べられるに留まる[6)]。

4）カラーバーズィーの著作について

現在に伝わる著作は２点のみである。主著はここに訳出した『タサウウフの徒の教えの解明（*al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*）』で、カラーバーズィーの名声はもっぱら本書による。本書は、「もし『解明』なかりせば、タサウウフ知られざるべし（law lā *al-Ta'arruf* la-mā 'urifa al-taṣawwuf）」と謳われた[7)]。

ほかには、375/985-6 年脱稿の *Baḥr al-fawā'id fī ma'ānī al-akhbār* というハディース注釈の本が知られる[8)]。この中では、宗教実践、倫理や礼儀作法、スーフィズムなどに関わりのあるハディースが注釈されており、その多くは後にマッキーの『魂の涵養（*Qūt al-qulūb*）』やガザーリーの『宗教諸学の再興（*Iḥyā' 'ulūm al-dīn*）』にも採り上げられている。

ほかにも下記のような著作の名が知られているが、いずれも現在に伝わっていない。

al-Arba'ūn fī al-ḥadīth, *Amālī fī al-ḥadīth*, *Faṣl al-khiṭāb*, *al-Ashfā' wa al-awtār, Mu'addil al-ṣalāt*.

5）『タサウウフの徒の教えの解明』について

本書は何度も刊行されているが、その主なものは以下のとおりである。

al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf, bi-hāmish *Iḥyā' 'ulūm al-dīn* lil-Ghazālī, Istānbūl, 1321A.H.[9)]

A.J. Arberry (ed.), *al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf, al-Qāhira: Maktaba al-khānjī*, 1352/1933[1934].

'Abd al-Ḥalīm Maḥmūd & Ṭāhā 'Abd al-Bāqī Surūr (eds.), *al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*, al-Qāhira: Nashr al-turāth al-ṣūfī, 1379/1960.

Maḥmūd Amīn al-Nawāwī (ed.), *al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*, al-Qāhira: Maktaba al-kullīyāt al-Azharīya, 1400/1980.

al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf: Law lā al-Ta'arruf la-mā 'urifa al-taṣawwuf, Bayrūt: Dār al-īmān, 1407/1986.

Aḥmad Shams al-Dīn (ed.), *al-Ta'arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*, Bayrūt: Dār al-kutub al-'ilmīya, 1413/1993.

以下『タサウウフの徒の教えの解明』の内容を、アーベリーらの解説に従い、５部に分かって説明する[10)]。

（1）１～４章：序にあたる部分。「タサウウフ」「スーフィー」の語の語源説を述べた後、徳行伝・人名録の形で、著名なスーフィーたちを列挙して説明する。

6）たとえば 9/15 世紀に書かれたハナフィー法学派列伝では、たった２行の記述がみられるのみである［Ibn Quṭlūbughā 1962: 87］。

7）この言葉は、著者不明の注釈の序文に、スフラワルディー・マクトゥール (d. 587/1191) のものとして言及されている。［Arberry 1935: xii］参照。

8）これまでに２度刊行されている (Muḥammad Ḥasan Muḥammad Ḥasan Ismā'īl & Aḥmad Farīd al-Mazīdī (eds.), Bayrūt: Dār al-kutub al-'ilmīya, 1999; Wajīh Kamāl al-Dīn Zakī (ed.), 2 vols., al-Qāhirah: Dār al-Salām, 2008）。また、本書で取り上げられている 222 のハディースの内、最初の 100 個分だけについて校訂した修士論文に、［Karapınar 1999］がある。

9）［al-Ḥabashī 2004: 604］による。ただし筆者未見。

10）［Nwyia 1978］は、以下のように３つの部分に分けて説明する。第１部（第１章～第４章）は本文で述べたとおり。第２部（第５章～第 65 章）はスーフィーの認めるイスラームの根本信条について (正統性の主張)。続く第３部（第 66 章～第 75 章）はスーフィーたち自身のことばを引用しつつ、それを解釈する形で、神秘道の階梯を説く、とする。

（２）５～30 章：スンナ派神学とスーフィズムとの整合性を示す部分。ここでは、著者不明ながら権威のあった『第２大フィクフ（*al-Fiqh al-akbar al-thānī*）』や著名な神学者ナサフィーの信条に沿う形で論述が行われている[11)]。
（３）31 ～ 51 章：スーフィーの修行階梯・心的状態の説明。
（４）52 ～ 63 章：スーフィズムの術語の説明。
（５）64 ～ 75 章：奇蹟・幻視などスーフィズムにおける諸現象の説明。

なお本書には、古くアーベリーによる英訳［Arberry (tr.) 1935］があり、このせいもあって、研究者なら誰でも知る古典となってきた。ほかにも、フランス語・ペルシア語・トルコ語・ウルドゥー語などへの現代語訳がある。情報は以下のとおり。

R. Deladrière (tr.), *Traité de soufisme: Les maîtres et les étapes*. *Kitāb al-ta‘arruf li-madhab ahl al-tasavvuf*, Paris, 1996.

Muḥammad Javād Sharī‘at (ed. & tr.), *Matn wa tarjama-yi Kitāb-i ta‘arruf*, [Tehran], 1371A.H.S./[1992].

Süleyman Uludağ (tr.), *Doğuş Devrinde Tasavvuf*, İstanbul, 1979.

Tacettin Okuyucu (tr.), *Ehl-i Tasavvuf Yolu*, Konya: 1981.

Ḥasan Muḥammad (tr.), *al-Ta‘arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*, Urdu, n.p., [1391/ 1971]

６）『タサウウフの徒の教えの解明』の注釈について[12)]

本書はごく早い時期にペルシア語で注釈されている。

最も浩瀚で、かつ最初期の重要なペルシア語著作としても重要なのが以下のものである。

Ismā‘īl b. Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Mustamlī (d. 434/1043), *Nūr al-murīdīn wa faḍīḥa al-mudda‘īn wa qam‘ al-mubtadi’īn wa ḥujja ahl al-sunna wa al-mu’minīn*, 2 vols., Lucknow, 1328/1912,

Ibid., ed. by Muḥammad Rawshan, 4+1 vols., [Tehran], 1363-66A.H.S./1984-87.

次いで、後代の作品であるが、上記注釈の要約である

Aḥmad ‘Alī Rajā’ī, *Khulāṣa-yi sharḥ-i Ta‘arruf*, Tehran, 1349A.H.S./1971

が挙げられる。今回の訳出にあたっては、上記２つの注釈を適宜参照した。また、著者不明の要約が他にももう一つ存在するとのことである［Uludağ 2002: 192］。

また、アラビア語の注釈としては

‘Alā’ al-Dīn ‘Alī b. Ismā‘īl al-Qūnawī (d. 727/1326), *Ḥusn al-ta‘arruf fī sharḥ al-Ta‘arruf*

があるが、未公刊。

他にも、やはり著者不明のアラビア語の注釈が、複数のトルコの写本館に所蔵されているが、これは上記クーナウィーの注釈の要約のようなものだとウルダーは述べている［Uludağ 2002: 193］。

ほかにも、ハージャ・アブドゥッラー・アンサーリー・ハラウィー（d. 481/1086）によるアラビア語の注釈もあったと記録されているが現存しない。また、ギースーダラーズ（d. 825/1422）も注釈を残したことが知られている。

11）いったいにこの時期のマニュアルは、単にスーフィズムの説を整理して提示するだけでなく、それらがスンナ派神学や法学と整合していることを示して、スーフィズムの「正統性」を主張することに特徴がある。彼以外にも、ホラーサーンのサッラージュ（378/988 年没）、イラクで活躍したマッキー（386/996 年没）らが、時にスーフィズムの内部批判の形をとりつつ、スーフィズム理論の整理と合法性の主張につとめた。

12）本節は主として［Ritter 1933: 78-83; Sezgin 1967: 668-669; Zarrīnkūb 1357 A.H.S./1978-9: 68-70; Madelung 1985; Uludağ 2002; al-Ḥabashī 2004: 604］に依拠した。

【解題への参考文献】

東長靖 2002「スーフィズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』第2号（2002年11月），173-192頁.

ニコルソン, R. A. 1996 (1914)『イスラムの神秘主義－スーフィズム入門』(中村廣治郎訳)平凡社.(原著 R. A. Nicholson, The Mystics of Islam, London, 1914.)

Arberry, A. J. (tr.) 1935. *The Doctrine of the Ṣūfīs*, Cambridge.

Baldick, J. 1989. *Mystical Islam: An Introduction to Sufism*, London.

Frank, Tamar 1984. "“Taṣawwuf is...”: On a Type of Mystical Aphorism," *Journal of the American Oriental Society* 104(1), pp. 73-80.

al-Ḥabashī, ‘Abd Allāh Muḥammad 2004. *Jāmi‘ al-shurūḥ wa al-ḥawāshī: Mu‘jam al-shāmil li-asmā’ al-kutub al-mashrūkha fī al-turāth al-Islāmī wa bayān al-shurūḥi-hi*, vol. 1, Abū Ẓabī.

Ibn Qutlūbughā, Abū al-‘Adl Zayn al-Dīn Qāsim (d. 879 A.H.) 1962. *Tāj al-tarājim fī ṭabaqāt al-Ḥanafīya*, Baghdād.

Jāmī, ‘Abd al-Raḥmān (d. 898 A.H.) 1370 A.H.S. (=1991-92). *Nafaḥāt al-Uns*, Tehran.

Karapınar Fikret 1999. *Ebû Bekr Muhammed b. İshak el-Kelâbâzî'nin Meani'l-ahbar Adlı Eserinin İlk Seksen Varağının Tahkik ve Tahrici* (Yüksek lisans tezi, 1999) SÜ Sosyal Bilimler Enstitüsü, tür. yer.

Madelung, W. 1985. s.v. “Abū Bakr Kalābāḏī Boḵārī Moḥammad b. abī Esḥāq Ebrāhīm b. Ya‘qūb,” *Encyclopaedia Iranica*, vol. 1, pp. 262-263.

Massigon, L. 1954. *Essai sur les origines du lexique de la mystique musulmane*, new ed., Paris.

Nurbakhsh, Javad. 1981. *Sufism I: Meaning, Knowledge, and Unity*, London and New York.

Nwyia, P. 1978. s.v. “al-Kalābādhī, abū Bakr Muḥammad b. Isḥāḳ,” *EI*[2], vol. 4, p. 467.

Ritter, H. 1933. *Orientalia, von Hellmut Ritter*, vol. 1, Istanbul.

Sezgin, F. 1967. *Geschichte des arabischen Schrifttums*, vol. 1, Leiden.

Uludağ. Süleyman 2002. s.v. “Kelâbâzî, Muhammed b. İbrāhim,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. 25, pp. 192-193.

Zarrīnkūb, ‘Abd al-Ḥusayn 1357 A.H.S./1978-79. *Justjū dar taṣawwuf-i Īrān*, Tehran.

２．翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、*al-Ta‘arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf: Law lā al-Ta‘arruf la-mā ‘urifa al-taṣawwuf*, Bayrūt: Dār al-īmān, 1407/1986, pp. 89-90 を底本とし、Aḥmad Shams al-Dīn (ed.), *al-Ta‘arruf li-madhhab ahl al-taṣawwuf*, Bayrūt: Dār al-kutub al-‘ilmīya, 1413/1993, pp. 103-104 と照合した。前稿同様、2006年度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した（敬称略、所属は当時）。横内吾郎、篠田知暁、日野恵美、小倉智史、岩本佳子（以上文学研究科）、高垣ひとみ、上柿智生（以上文学部）、黒田賢治、堀拔功二、丸山大介（以上アジア･アフリカ地域研究研究科）、澤田萌（大阪外国語大学）。これら学生諸君から貴重な意見･示唆を与えられることが少なくなかった。

訳文中、［　］で囲った部分は、訳者が説明のために補ったものである。

第 32 章「タサウウフとは何かについて」

アブー・アル＝ハサン・ムハンマド・ブン・アフマド・アル＝ファーリスィー[13] が「タサウウフの柱は 10 ある」と言うのを私は聞いた。

その第１はタウヒード（神の唯一性）から余分なものを剥ぎ取ることである。それから［第２は］［神の声を］聞くこと［について］の理解、［第３は］良好な交友関係、［第４は］より好むことをより好むこと（優先の優先）、［第５は］自分勝手な意志[14] を捨てること、［第６は］素早い直接体験、［第７は］想念の開示、［第８は］旅の多さ、［第９は］手に入れるのを手控えること、［第 10 は］蓄えを禁ずることである。

［第１］「タウヒードから余分なものを剥ぎ取る」とは、擬人神観（tashbīh）[15] や［神からの］属性剥奪（ta‘ṭīl）[16] の想念が［タウヒード］と混ざり合ってそれを汚すことがない、ということである[17]。

［第２］「聞くことの理解」とは、［外面的］知識のみでなく、その人の［神秘階梯を進む時の心的］状態によって聞くことである。

［第４］「より好むことをより好むこと」とは、より好む（優先する）ことによって、他人を自分よりも好む（優先する）ことであり、それはより好むこと（優先）の徳が他人のものになるようにである[18]。

［第６］「素早い直接体験」とは、最内奥の心（sirr）が、直接体験を促進するものからはずれることがなく、また最内奥の心が、真理［なるアッラー］の呼びかけを聞くことを妨げるものに満ち満ちないことである。

［第７］「想念の開示」とは、自らの最内奥の心に浮かぶあらゆることを検討し、真理［なるアッラー］に属するものに従い、属さないものを捨て去ることである。

［第８］「旅の多さ」とは、あらゆるところに［アッラーの］栄光を見出すためである。

至高なるアッラーは言われた。「彼ら（マッカの多神教徒）は、『地上を旅して彼ら以前の者の最後がどうであったかを観察しないのか。』」（Q2:117）「言ってやるがいい、『地上を旅して観察せよ。彼らがいかに最初の創造をなされたかを。』」（Q29:20）［アッラー］――高められ、威厳あらんことを――のお言葉［クルアーン］の中に、「言ってやるがいい、『地上を旅せよ』」という言葉がある［わけだが、そこでアッラーが］言われるのは、無知の闇によってでなく、真知の光によって、因果（asbāb）[19] を断ち切り、霊魂を修練するために［旅せよ］ということなのだ。

13）カラーバーズィーのスーフィズムにおける師の一人。解題参照。

14）自由意志と訳すこともできる。この時代は、神の予定説と人間の自由意志説のいずれが正しいかについて、神学において議論がなされていた時期であり、このことと関係があるかもしれない。

15）タシュビーフとは神を人になぞらえて描写もしくは理解すること。スンナ派ではごく早い段階で異端的解釈とされた。

16）神の属性を本質と同時に永遠なる存在として認めるかどうかは、早くから神学的議論となった。アシュアリー学派では、神の属性を永遠なるものとして認める立場をとり、属性を神に認めない立場をタアティールと呼んで非難した。

17）ムスタムリーの注釈によれば、彼を汚す云々とあり、想念が［アッラー］を汚すの意味かもしれない。Ismā‘īl b. Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Mustamlī, *Nūr al-murīdīn wa faḍīḥa al-mudda‘īn wa qam‘ al-mubtadi’īn wa ḥujja ahl al-sunna wa al-mu’minīn*, ed. by Muḥammad Rawshan, vol 3., [Tehran], 1365A.H.S./1986-87, pp. 1167-1168 参照。また、同注釈を下敷きにした現代の注釈書であるラジャーイーの注釈も同じ文言を引いている。Aḥmad ‘Alī Rajā’ī, *Khulāṣa-yi sharḥ-i Ta‘arruf*, Tehran, 1349A.H.S./1971, p. 265 参照。

18）この部分は、ある種の利他主義を説いていると考えることができる。

19）ムスタムリーの注釈によれば、むしろ人と人とのつきあいというしがらみを指す。al-Mustamlī, *ibid*., p. 1177 参照。

［第９］「手に入れるのを手控えること」とは、霊魂が神への絶対的信頼（tawakkul）を求めるようにである。

［第10］「蓄えを禁ずること」とは、必然的知者［であるアッラー］に関して［の知識の蓄えを禁じているの］ではなく、［日常生活の］状態において［金品を溜め込むことを禁じているの］である。それはちょうど、預言者が次のように言われたのに見るようなものである。すなわち、ベンチの徒（ahl al-ṣuffa）[20] の一人が、1ディーナールを残して死んだ時に、アッラーの使徒は「焦熱［地獄行き必定］だ」といわれたのである。

20）預言者ムハンマドの生前、彼の家のベンチに坐って、親しくムハンマドの声を聞き、接した直弟子たちを指す。